

異郷での彷徨

——「上海」の一解法

比類のない巧みな群衆描写と、例えば、「世界の実行力の中心点は黄色人種にあるといふことになる」(「二八」)などのように危うい記述との評価軸の間で多くの批評の榮に浴して来た「上海」(昭和三年十一月～六年十一月、『改造』)は、しかし、それが仮令作者横光に対して好意的な読みの場合であっても、内容的・構造的批判を微塵も随伴しないものは、ほぼ絶無であった。

新感覚派的描写法の達成、否その終局、発表状況の複雑さと改稿の問題、(「小説」との呼称の付与の困難性、「機械」(昭和五年九月、『改造』)に顕在化する自意識点描の萌芽、史実との一致と不一致など、様々な問題を論者に吐露させつつも、そこに非難の要素を含ませる事を忘れなかった。換言すれば、「上海」は、前記評価の揺れを前景化させる事により、読者を多く「論ずる」という場を引き出して来たテキストであると言えよう。

中川 智 寛

本稿においては、主要登場人物の造型分析に軸心を置きつつ、先行研究が言及していない諸要素についても、可能な限り述べて行きたい。

一

確証は得られないものの、中心人物は、恐らく参木だと思われる。しかし、参木と作者横光とがほぼイコールであるとの見解は、(「性急な結論に思え、安易に肯定出来ない」。

参木の特性としてまず挙げられるのは、「だんだんと死の魅力に牽かれてい」き、「一日に一度、冗談にせよ、必ず死ぬ方法を考へ」(「一」)ている人物だという事である。人生の中に積極的に生きる目的を見出せず、「——俺の生きてゐるのは、孝行なのだ。俺の身体は親の身体だ、親の。俺は何んにも知るものか。——」(「二」)

とまで割り切って考えている。このような参木の思考形態は、作中でほぼ一貫されていると見る事が出来、物語全体に退廃的な気配を充溢させるのに寄与している（もともと、「死にたい」という言葉は、参木の影響を受けてか、お柳が発話する箇所もある）。

トルコ風呂（原文通り）の店主お柳は、どこか参木の事が気に入っている様子でもあるが、参木は、「まだ一度もお柳の誘ひを赦したことがない」（二三）。一方、お杉の事は参木自身、かなり心配しているようであるが、そのお杉に対しても、「参木は前に行く彼女の身体に手が延びさうな危険を感じ」（一〇）と、お杉を一人で先に帰らせるなどして自らの身を律しており、ある意味で潔癖であると言える。

当初勤めていた「常緑銀行」を専務との確執により蹴首された後、高重の紹介によって「東洋綿糸会社の取引部」に再就職する（一九）。ある日、工場を高重に案内されていた参木は、そこで芳秋蘭を見付け、彼女について高重から説明を受ける。その後の、次のような記述は重要であろう。

参木はその逆巻く棉にとり巻かれると、いつものやうに思ふのだ。——生産のための工業か、消費のための工業か、と。さうして、参木の思想は、その二つの廻転する動力の間で、へたばつた蛾のやうに、のた打つのだ。（二三）

単に退廃的・虚無的と見えていた参木の胸に、資本主義経済の構造への深い懷疑の念が封じられていた事が分かる。ここで、参木は、「支那（原文通り—中川注、以下同様）の工人には同情を持」ちつつも、「埋蔵された原料を発掘する」事の優先性を思う。一方、「工人達」の「反抗」もあり得ると考えていて、冷静な視点も持ち合わせている。

また、参木は、ナシヨナリスティックな思考を体现する人物という点においても、非難の対象となる場合がある。例えば、以下のよう

彼は自分の身体が、母の体内から流れ出る光景と同時に、彼の今歩きつつある光景を考へた。その二つの光景の間を流れた彼の時間は、それは日本の肉体の時間にちがひないのだ。そして恐らくこれからも。しかし、彼は彼自身の心が肉体から放れて自由に彼に母国を忘れしめようとする企てを、どうすることが出来るであらう。だが、彼の肉体は外界が彼を日本人だと強ひることに反対することは出来ない。心が闘ふのではなく、皮膚が外界と闘はねばならぬのだ。すると、心が皮膚に従つて闘ひ出す。（三五）

すると、彼は彼をして空腹ならしめてゐるものが、ただ僅に自

身の身体であることに気がついた。もし今彼の身体が支那人なら、彼は手を動かせば食へるのだ。それに——彼は領土が、鉄よりも堅牢に、自身の肉体の中を貫いてゐるのを感じないわけにはいかなかった。(四〇)

いずれも、上海という異国の地における参木の肉体感覚と、「領土」への省察が吐露されている箇所である。恐らく、これまでこれらの描写が批判されて来た事由は、参木の心内表現の中の「領土」や「身体」という語が着目され、参木が自身の立っているその場を日本の「領土」と見做す、そのような考えが帝国主義的である、といったような文脈がそこに見出されていたからだろう。しかし、特に後者の引用部前後を精読してみると、そのように簡単には概括出来ない事に気付く。これらの場面において参木が発する「領土」という語は、中国から篡奪し得る土地というような単一的な意味ではなく、「自分自身の帰属すべき国・地域」といった意も含めた、より複層的なものとして理解されるべきであろう。

参木は、従来論じられて来たような、一語(例えば、「ドン・キホーテ」など)で統括可能な人物ではなく、様々なヴェクトルを包摂した、複雑な人物として造型されていると考えられる。女性関係という点においても、真に想っているのは競子(これもしばしば指摘されている事だが、この女性は、作中でその実際の姿を一度も現さない)

であるとの記述があるが、芳秋蘭に一目惚れしたり、結末近くではかなりお杉に傾斜したりという風(5)に定まりを見せておらず、先述の潔癖な要素と、どこか背反している。

二

参木以外の主要人物についても概観しておきたい。

甲谷は、暗闇の中でお杉の貞操を奪っておきながらも、それを金銭で解決出来ると信じて微塵も疑わぬ人物である。銭石山との経済議論(二八)の中では、中国が、自分で自分の首を絞めているとの見解を示し(これには銭もある程度同調している)、金銭の権化であるかのような描かれ方がなされている。しかし、同じくこの銭との応酬の中では、中国を賞揚する言辞と批判する言辞とを混淆させて応戦しており、強かな一面も見受けられる。

また、甲谷は、どこか浮薄な感じが否めず、参木と釣り合う程の描写はなされていない。後年の所謂純粹小説群、またはそれら以後の横光の作品であれば、この甲谷の立場の人物のテクスト内での濃度が高められ、主人公と対等の位置に立って議論したりする素地を与えられるのであろうが、本作では、主人公とそれに比肩するライバル的位置の人物造型という点に限れば、純粹小説群への試行段階であつたと見做されよう。

甲谷は更に、宮子に言い寄る際にはシンガポールへ行っても良い

と話するなど、参木とは異なる意味で、舞台上海には根差していない。お杉に対してもだが、上海という生活の地自体を、極めて軽く考えているのである。

高重は「国粹主義」、山口卓根は「アジア主義」の役割をそれぞれ割り当てられ（四）、特に山口は、後半、甲谷が自分の元に逃げ込んで来た時に、地下の死体に溢れた「製作所」を披露する（四二）など、グロテスクな一面も強調されているが、それぞれがどこかアンバランスな記述がある事も否めず、作中で重要な役割を付されていない。殊に高重の描写については、それが後半で今少し盛り込まれていれば、小説はより精彩を帯びたのではないかと思われる。

お杉については、貞操を奪われた直後の段階では、その犯人が参木か甲谷か明らかにはされておらず、その謎が物語展開の一つの軸心となる可能性が匂わされるが、その犯人は甲谷である事が程なく作中で明かされる為、その謎の要素も消滅する。誠首にレイプという過酷な運命を強いられたお杉は、しかし、春婦となる事を自分で決意してからは、都市の陥穽に沈降するかの様に、一旦作中で描かれなくなる。そして、結末近く（加筆された部分）で再び盛んに描かれる事になり、参木の想う対象がお杉に移って行ったかに見える、一つの要因となっている。特に、お杉についてのこの加筆がなされた理由は、田口律男の指摘の通り、そこに反国家的な傾向を植

え付ける必要性があったからであろう。亡夫（お杉の父）の恩給で辛うじて生計を立てていたお杉の母が、突如として支給「不正当」との事由によってその恩給全額の返却を要求され、それを苦にして自裁した事が書き加えられたのは、単にお杉の人物像の悲劇的色彩を濃くする為ばかりであつたとは考えられない。わざわざ恩給という要素も付加してこのような形象を与えられる事で、お杉は、参木や甲谷とはまた異なる位相において、特定の国家や地域に帰属しない（出来ない）根なし草としての立場を明瞭にされたのである。そして、改稿部分も加えた「上海」全体において、参木・甲谷と同等の（あるいは、甲谷に対してはそれを凌ぐかも知れない）位置を付与されたと言える。

そして、作中で異色の光彩を放つ芳秋蘭だが、暴動の後に参木に対して「でも、それ（暴動・罷業——中川注）はあたくしたちの手で起きなければ、あたくしのやうに、お国の方に御迷惑をおかけするやうな結果になるだけだと思ひますの」（二四）と言ひ、革命家としての矜持と自尊心を示したり、群衆描写の際に多く介在したりという風に、物語の大きな駆動源となっていると目されるのだが、高重同様、後半でその描写が漸減化して行つたとの感はある。参木と男装した芳秋蘭とが奇跡的に再会した後は、秋蘭の死の情報だけが参木に齎され、その情報の当否は明らかにされないままに物語は終わるのだが、生きる方途を見失つてしまっている参木と、

革命家として生命を賭している芳秋蘭との遣り取りが、もつとふんだんに加えられるべきだったと考えられるのである。しかし、その生死が曖昧にされる事で、芳秋蘭もまた、帰着点を持たずに一瞬一瞬を生きて行く人物として点描されているのである。⁽⁷⁾

芳秋蘭とは描かれ方が大きく異なるが、「モスコウ」への郷愁の念を露わにしつつ（「一二」、後半（「四三」）でもその苦難の逃走の顛末を甲谷に話すオルガも、舞台上海に定着しておらず、そこからの脱却を常に夢見ている事が、特性として見受けられる。

今までに挙げた人物達と比べ、かなり違った描かれ方なのは、宮子である。上海が混乱の極みに達している事を甲谷から指摘され、共にシンガポールへ逃げる事を求められた際の、宮子の回答。

だつて、あたしにや此の街ほど大切な所はないんですもの。
あたしここから出ていったら、鱗の乾いたお魚みたいよ。もう
どうすることも出来なくなれば、あたし死ぬだけ。あたし覚悟
はいつだつてしてるんだけど、でも、あたし此の街はやつぱり
好きだわ。（「三七」）

少なくともここでの宮子の発話からは、彼女が上海という土地にかなり拘泥している事が分かる。これまで述べて来たように、小説「上海」の主要登場人物は作品の舞台上海に根差しておらず、嫌気

を示している者さえいる。そんな中であつて、このような感情を発露する宮子は、異色であるとも言える。小説「上海」において、その舞台に最も執着しているのは宮子であり、ある意味で、そうではない他の主要人物を相対化する存在なのである。

三

以上見て来たような、登場人物達とその作品舞台との拮抗は、小説内の言語という問題点においても、作品の中かなり影を落としている。

参木とオルガとの遣り取りの中で、オルガがあまり英語が得意でない為、「参木はもう三日間、ブロークンな英語の整理に疲れてゐた」（「一二」）との記述が現れる点からは、参木が日常会話程度の英語（勿論、ここでの「英語」は、作中の上海で通用しているもの、という意味である）に支障がない事が示されている。また、宮子が参木に対して「あたし、甲谷さんの好きな所は、御自分の英語の間違ひも御存知にならない所だけよ。あれならきつと奥さんにおなりになる方だつて、お幸せにちがひないわ」（「二九」）と指摘する箇所からは、参木とは対照的に、甲谷が英語を不得意としている事が窺える。

一読して分かるこれらの要素以外にも、「上海」には、言語を巡る様々な戦略が張り巡らされている。これまでの研究では、黒田大

河⁽⁸⁾が登場人物達の身体性の問題と関連付けた指摘を行い、また、金槓⁽⁹⁾によって、関わりの深い語同士の呼応関係が見出されたりといった成果が上げられているが、これらの論及と関係性があると考えられる箇所として、数例を引く。

①此の馬車を動かす蒙古馬の速力は、刻々ニューヨークとロンドンの為替相場を動かしてゐるのである。馬車は時々車輪を浮き上らせると、軽快なヨットのやうに、飛び上つた。その上に乗つてゐる仲買人達は、殆ど欧米人が占めてゐた。彼らは微笑と敏捷との武器をもつて、銀行から銀行を駆け廻るのだ。

(七)

②「われわれは支那人の排英にはもう賛成しませんね。支那人に出来るのは、排支だけだ。」

「廃止か。」(三二)

③「(略) 凡そ今回の事件は、中、英、国際の紛争に非ずして、実は黄白消長の関鍵であり、之を換言すれば、即ち、(以下略)」(四三)、傍点いずれも中川

①は「微笑」と「敏捷」、②は「排支」と「廃止」、③は「関鍵」

と「換言」という風に、意味は全く異なりながらも発音が同じ(または似ている)語を並列させている事が分かる。

①は、甲谷が「村松汽船会社」へ向かつている車の中から、「並列した銀行めがけて、為替仲買人の馬車の密集団が疾走してゐる」のを目撃する箇所であり、後の罷業・暴動の場面程には大々的でないが、「上海」における群衆描写の一環と見る事が出来る。甲谷はここで、「彼等の株の売買の差額は、時々刻々、東洋と西洋の活動力の源泉となつて伸縮する」と感じ、そこに国際的な経済活動のエネルギーを感じ取っている(しかも甲谷は、この「為替仲買人になるのが理想であつた」)。

②は、前者がアムリの発話、後者が山口の発話であり、山口の方が文字通りのダジャレで応じたものである事が分かるが、この遣り取りの前後には、暴動の原因となつた「発砲」の犯人推理を巡る会話があたり、「ガラス台の下の寶石類」の出所についての話があったりと、複雑な国際関係問題という枠組みの中で話されたものである事が分かる。

③も同様であり、これは、李英朴から山口宛ての手紙の一部分である。甲谷が「名文」と評価するその内容は、欧米の帝国主義的政策を「滅種計画」として鋭く非難し、「願くば君吾が説に賛成するあらば、共に起ちてこれを図り、併せてわが民族の救援につき討論せんことを請ふ」と結ばれている。母国の現状と未来を強く憂慮しつつも、何とか希望を見出そうとしている。

①から③は、いずれも緊張した国際関係が記述されている箇所であ

あり、そこに併せて前記のような掛詞的言辭が配されているのは、偶然と言うよりは寧ろ、作者横光の強い意図がそこに籠められていると考える方が自然だろう。地の文・会話文・手紙文と、わざわざ異なる位相でこのような表現を盛り込んだのは、この小説の言説レヴェルの全てにおいて、登場人物がそれぞれの言語感覚を動員し、自らの発語・語感を異郷において確認している事を示していると読み取れる。¹⁰それは、自己の発する言語の確実性を常に模索している試みとも見え、その要素がアムリや李英朴など、作中ではやや周縁的な位置に置かれている人物にも据えられている点に、注意の必要があるだろう。

主要登場人物が自分達の帰属すべき場所を求め続けている様は、それぞれが発する言語面においても、そして更には地の文においても示されており、作中でしばしば記述される切迫した国際情勢と対応する形が取られているのである。

これについては、横光自身の文字への眼差しが顕在化している好例であるとも理解できよう。横光は、「文字について―形式とメカニズムについて―」¹¹において、

文字は物体である。(中略)しかし、文字は物体である以上、メカニズムに従へば、内容を持つてゐる。さうして、その文字と云ふ物体の内容は、どこから測定するか。即ち、われわれは

その内容を、われわれの感覚と知覚とに従つて、その文字である物体の形式から、山なら山、海なら海と云ふエネルギーを感じるのだ。その場合、われわれが、その文字である物体の形式から、何の特別なエネルギーをも感じないとすれば、その感じ得られなかつたその者の感覚と知覚に、何らかの欠陥があつたので、それはその文字である物体としての形式そのものには、何の責任もないのである。

と述べている。

引用部から、横光が、文字に対して自律性と質料性の双方を認めるといふ、独特の考えを持っている事が分かる。この文章が、まさに「上海」の連載期間中に発表されたという事にも注目しておこう。「上海」における先述のような試行は、この論理の直線的な実践というよりは、これが更に変化したものであろう。引用部の後には、文字と作品内容との関連の重要性、文字のエネルギー、形式主義などへと話題が展開され、文字というものに対する、横光の並々ならぬ関心が窺える。この文章の中で「音響」への言及がある事からも分かる通り、この種の意識は、「雅歌」(昭和六年七月一日〜八月十九日、『報知新聞』)などにおける聴覚表象の試行や、「旅愁」(昭和十二年四月〜二十一年四月、『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』『文藝春秋』他)で批判の対象となる淫祠の場面などとも、密接な関連があると

思われる。

結 語

これまで述べて来たように、「上海」の主要登場人物達は、宮子を例外として、舞台上海に執着していない造型であるという事が指摘出来、そしてそこからは、人は土地・国家に固着すべき存在ではないという事を描出したとした作者の意図が見える。

参木に部分的な資本主義批判の要素を盛り込みつつも、それを巧妙にオブラートし、参木を含めた多くの主要人物に故郷喪失者としての造型を行う事により、作品はその目的に近接して行った。その試行は、本論で触れた言語面の描写、あるいは、しばしば指摘される水・流れの記述、そして「雛」や「子供」の死体の描写（これは、しかるべき場所に埋葬されていないという点において）などとも、緊密に対応しているよう。

作者横光は、当初この物語に「上海」というタイトルを冠する事を嫌気し、「ある唯物論者」としたい心算であったというが、その理由の一端は、ここで論及して来た事を考え合わせると、窺い知る事が出来よう。上海という地名は、この小説においては、登場人物達が様々な事情によって脱却を模索していた場所を示しており、彼らに取ってそこは、超越すべきものの象徴であったとも言える。主要人物の多くが執着を見せていないその地名を表題にするのは、相

応しくないと横光が考量した可能性はある。その点においては、「唯物」の要素は参木ばかりでなく、甲谷やお杉にも見られる事から、「ある唯物論者」の方が適していたのではないかという感はある。

また、舞台である上海という都市を一つの器と見立てた場合、その内部で活動する参木・甲谷・芳秋蘭らに作用する時間と、その器が吞まれている激流の速さとは、あまりにもその速度が異なっていたのではないか。当然の事ながら、「上海」という小説の描写対象は主として前者に置かれたが、後者との圧力差によって、小説全体の軋みの音が次第に大きくなって行ったと思われる。その影響を最も多大に受けたのは恐らく参木であり、それは、彼の描かれ方の変化の中に顕現して来る。⁽¹³⁾ この、作品舞台内外の時間の位相差を考えるという上でも、「ある唯物論者」という題の方が好適であったであろう。

今日ではそのタイトルで通用している「上海」という言説空間に対し、様々なレベルでの読解を試みないと、読書行為そのものが空洞化してしまう可能性をも、この小説は示していると考えられるのである。

注

(1) 「上海」の引用は、『定本 横光利一全集』第三卷（昭和五十六年九月、河出書房新社）によるが、同書の「上海」の底本は、昭和七年七月に改造社から出された初刊本である。引用に当たっては、漢字は現行の字体に改め、仮名遣いは原文を尊重した。他の横光の文章についても、同全集によった。

(2) 昭和三年十一月から昭和六年十一月まで『改造』に連載され、昭和七年六月発行の『文学クォーター』第二輯に「午前」が発表された。

昭和七年七月に先掲(1)の初刊本が刊行されたが、初出と初刊本との間には、多くの異同がある。昭和十年三月には書物展望社からも刊行された（『定本版』などと呼ばれる）が、初刊本とこの書物展望社版との間にも、異同が多い。

これらの、諸本の異同や作品のタイトルの問題、またはそれらへの作者横光の意図を考える文献としては、保昌正夫「編集ノート」（昭和五十六年九月、『定本 横光利一全集』第三卷所収、河出書房新社）、和田義一「原上海」と「上海」について（昭和三十八年十二月、福井大学『国語国文学』）、江後寛士「横光利一「上海」改稿の意味」（昭和五十八年十二月、『近代文学試論』）、祖父江昭二「上海」論——初出と初版本との比較を中心に——（昭和六十一年十月、伊藤虎丸・祖父江昭二・丸山昇編著『近代文学における中国と日本——共同研究・日中文学関係史——』所収、汲古書院）、福田要「横光利一『上海』論——〈未完〉と改稿における政治的意味」（平成元年三月、『南山国文 論集』）などがある。

(3) この点については、前田愛「SHANGHAI 1925——都市小説としての『上海』」（昭和五十六年八月、『文学』）、後、諸本に収録、國松昭「『上海』論」（昭和六十一年三月、『東京外国語大学論集』）、館下徹志「横光利一『上海』の五・三〇事件——歴史叙述の反証可能性——」（平成十年九月、『昭和文学研究』）、同「横光利一『上海』における「在華紡」——擬制としての受難／熱情の発動——」（平成十五年二月、『横光利一研究』）、趙夢雲「上海・文学残像——日本人作家の光と影」（平成十二年五月、田畑書店、「現代アジア叢書35」）などに考察がある。

(4) 菅野昭正『横光利一』（平成三年一月、福武書店）など。

(5) 先掲(3)前田愛は、その論の結末部において、これら参木の恋愛（その感情も含めて）対象となった女性達をも図式化しているが、本論で述べたように、参木は、ある女性から次の女性へというように対象を規則正しく変換しているのではなく、寧ろ、様々な女性に想いを残しつつもそれらの間で揺れ動いている、という読みが正確かと思われる。「上海」に記述されている実際の地名が「四川路八号十三番の皆川」しかないとの指摘など、前田論には卓見と評価される示唆も多いのだが、肝心の前記結論については同意しかねる。

また、参木が「表層から深層へ」と移動して行くという見解にも、疑義を示さざるを得ない。例えば、「旅愁」で描かれたような、有閑階級の神学論争的な不毛の議論を「表層」と呼ぶのならともかく、「上海」の主要人物達は、一貫して都市の「深層」を生きていたのではなかったか？

(6) 田口律男「横光利一『上海』論の試み(一)——娼婦へお杉」の

意味——」(昭和六十年十二月、『近代文学試論』)。

(7) 沖野厚太郎『上海』の方法」(昭和六十三年十月、『文芸と批評』)は、同時期のドイツ映画「メトロポリス」(フリッツ・ラング監督)の偽マリア像と芳秋蘭との共通性を指摘した上で、「上海」に横溢している水の描写についても、そこに「破壊」と「建設」の両義、即ち「革命」の喩えを読み取っている。

また、李征「横光利一『上海』における五・三〇運動の描写をめぐって——同時代関係史料との比較をとおして——」(平成八年三月、筑波大学比較・理論文学会『文学研究論集』)は、作中の「若干史実に反する」芳秋蘭の発話について、そこに「作家の意図による日本ナショナリズムへの配慮」があると指摘する。

更に、李征は、「身体性の表現と小説の政治学——横光利一『上海』における外国人表象——」(平成九年三月、筑波大学比較・理論文学会『文学研究論集』)において、銭石山の「醜悪」と対比して描写されている、芳秋蘭の「エキゾチズム」の要素に着目し、その造型法の中に、「上海」を「ロマンチックな大衆小説としても読ませたいという横光利一のねらい」を読み取っている。

(8) 黒田大河『上海』試論——身体と言語をめぐって——」(平成七年七月、『阪神近代文学研究』)。

(9) 金楨薫『上海』における様々なる「場」の意味——「他者」を「表現」ということ——」(平成十五年二月、『横光利一研究』)は、「金の相場が銅と銀との上で飛び上った」、「悲鳴を裂いて鳴り続けた」、「沸き上がる魚のやうに、沸騰した」(傍線いずれも金)などの表現技法に着目し、「前のことはが後のことが生成す

る源泉として機能し、そのようにして形成されたことばとことばの相互結合によって、一つの比喩的言語空間が形成されていく」と指摘した上で、これらの用例が「二三」章に頻出する事に注意を促している。

(10) ここで、中村三春「非構築の構築——横光利一『上海』の小説言語——」(昭和六十二年三月、弘前学院大学・弘前学院短期大学『紀要』)で述べられている、「登場人物すべてが等しく分有している逃走劇」という要素を気に留めておく必要がある。この場合の「逃走」とは、稿者が述べて来たような、帰属すべき場所を希求しての彷徨という事と、無縁ではあるまい。

そしてこれは、横光自身が「新感覚論——感覚活動と感覚的作物に対する非難への逆説——」(大正十四年二月、『文芸時代』、原題は「感覚活動(感覚活動と感覚的作物に対する非難への逆説)」)において述べていた、「自然の外相を剝奪し、物自体に躍り込む主観の直感的触発物」、あるいは、「一切の形式的仮象をも含み意識一般の孰れの表象内容をも含む統一体としての主観的客観から触発された感性的認識の質料の表徴」などの要素の部分的実践と見る事も出来、「上海」において新感覚派期の描法が多く生かされているという事の、証左の一つとなるであろう。

(11) 横光利一「文字について——形式とメカニズムについて——」(昭和四年三月、『創作月刊』、原題は「形式とメカニズムについて」)。

この文章は「三月号評論」の項目に収められているが、当該項目内で横光と勝本清一郎の主張とが対蹠的となった事について、「編

輯後記」(「発行兼編輯人」である菊池寛の筆か)では、「(略)該主義の主張論者と反対論者とが期せずして相對峙し、論戦に火花を散らした形である」とされている。「三月号評論」は、他に吉村鉄太郎が執筆。

(12) 水島治男『改造社の時代 戦前編 恐慌より二・二六事件まで』(昭和五十一年五月、図書出版社)。

(13) 十重田裕一「横光利一〈ある長篇〉の覚書」(平成元年五月、『繡』)は、当初それ程目立って描かれていなかった、参木における「〈外部〉―〈内部〉の関係」が、「持病と弾丸」や「海港章」周辺で顕著になっていると指摘し、そこに「遠近法の関係」や参木の「見る」行為を関連付けていて示唆に富む。